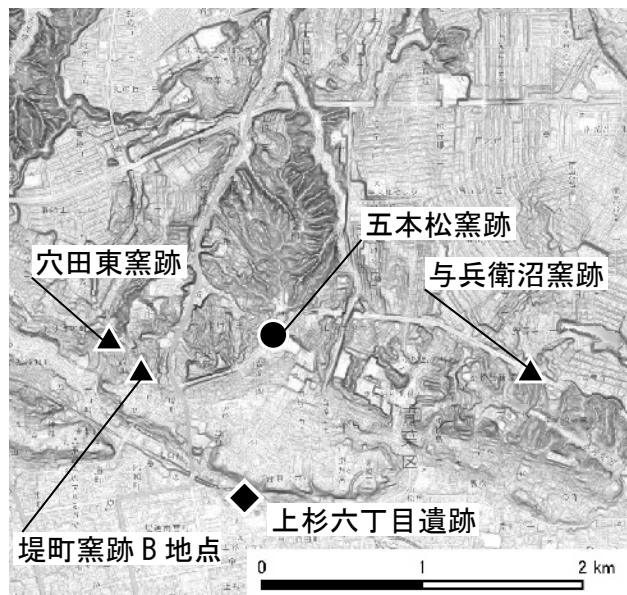


**所在地** 宮城県仙台市青葉区台原森林公園  
**立地環境** 台原・小田原丘陵の西部。標高 70  
 ～ 80 m  
**発見遺構** 瓦・須恵器窯、須恵器窯、窯の覆屋、  
 灰原  
**年代** 9世紀代

### 遺跡の概要

五本松窯跡は「陸奥国官窯」とも呼ばれる台原・小田原窯跡群に含まれる窯跡である。一連の窯跡群の西部に位置し、堤町窯跡などとともに平安時代に操業した（第1図）。内藤政恒の分布調査では一年坊澤と呼ばれる谷地の斜面から瓦が多量に採集されたという（内藤 1939）。その後「射撃場跡北方の瓦窯跡（C地点）」「射撃場跡東方の瓦窯跡（D地点）」として紹介され、丸瓦と平瓦が採集された。またやや西に離れた「堤町一本杉窯跡（B地点）」では宝相華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が採集されたという（内藤 1963）。



第1図 五本松窯跡の位置

その後「射撃場跡北方の瓦窯跡（C地点）」「射撃場跡東方の瓦窯跡（D地点）」として紹介され、丸瓦と平瓦が採集された。またやや西に離れた「堤町一本杉窯跡（B地点）」では宝相華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が採集されたという（内藤 1963）。しかし、丘陵部の急速な宅地開発により「堤町一本杉窯跡」などいくつかの散布地は消滅した。そのような中、1966年から古窯跡研究会が再度の分布調査を行い、詳細な散布地の把握と露出した窯などの記録が行われた（古窯跡研究会 1973）。

五本松窯跡はこれまで3回の発掘調査が行われている。第1次調査はG地点、第2次調査はD地点、第3次調査はD地点東部である（第2図）。

#### 1. 遺跡の立地と周辺の遺跡（堤町窯跡・穴田東窯跡・上杉六丁目遺跡）

台原とは台原・小田原丘陵の南裾に広がる緩斜面地帯（標高 30～100 m）で、五本松窯跡はこの緩斜面の北方、標高 80 m 前後の丘陵部に位置する。五本松窯跡D地点は窯跡群の最高所に当たる。A～D地点は北東から入り込む谷部の南・東斜面にあり、F地点のみ西斜面である。

五本松窯跡周辺には多賀城IV期に属する窯が点在する。堤町窯跡B地点では窯体こそ発見されなかったものの、土坑埋土から宝相華文軒丸瓦・歯車状文軒丸瓦・連珠文軒平瓦・須恵器などがまとまって出土した（仙台市 1982）。近年調査された穴田東窯跡では窯2基と灰原が検出され、宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が出土した（第3図）（仙台市 2022）。また、五本松窯跡の南方を流れる梅田川沿いの上杉六丁目遺跡では、9世紀代の土師器と須恵器が多量に出土している（仙台市 2021）。窯跡との関連は不明であるが、隣接する同時期の遺跡として注目される。

#### 2 検出された窯について

第1次調査で2基、第2次調査で15基、第3次調査で3基が検出された。遺物の検討から第3次調査の窯→第2次調査B群→C群→A群窯跡の変遷が捉えられており、第2次調査A群窯跡は台原・小田原窯跡群で最も新しい段階の可能性がある。規模は表に整理した。いずれも半地下式で、第2次調査では構架材の先端部が窯脇から多く検出されている。焼成部の傾斜は概ね 20° だが、第2次調査A群窯跡は比較的傾斜が緩く燃焼部と焼成部の境に段があり特徴的である。また、同B群窯跡は窯尻

に向かって床が反り返る断面形態であるのに対し、同C群窯跡は焼成部が平坦で長く、角度もやや急傾斜である。第3次調査S02は第2次調査C群に類似するが、窯を囲むように排水溝が巡る。同S03は燃焼部と焼成部の境にL字状の溝を設けた小形の窯で、台原・小田原窯跡群では珍しい須恵器専用窯とされる（仙台市2000）。

第2次調査B・C群窯跡は同規模の窯が並列しており、特に、B群窯跡は2基が1対となったグループが4つ並列し、全体を覆う覆屋が伴う（第4図）。調査時の所見では、2基1対のうち最後は左側の窯（5・7・9・11号）が操業したこと、瓦の焼台が良好に残る左側の窯で瓦が焼成され、須恵器が多い右側の窯（4・6・8・10号）で須恵器が焼成されたと推定された（仙台市1987）。こうした覆屋の類例は少なく、降雪のある中で瓦を焼成したためではないかと考えられている（仙台市1987）。

なお、窯以外の遺構では第2次調査の土坑がある。第2号土坑は白色粘土の詰まった粘土溜まりで、土坑内の粘土の鉱物組成はB群窯跡直下の白色粘土に類似するという。

### 3. 出土した瓦について

五本松窯跡では**宝相華文軒丸瓦**（第1次調査1号窯、2次調査B群窯、3次調査S02排水溝）、**齒車状文軒丸瓦**（第1次調査1号窯）、**陰刻花文軒丸瓦**（第2次調査A群窯）、**均整唐草文軒平瓦**（第2次調査B群窯表土）が出土した（第5図）。いずれも多賀城Ⅳ期のものである。

宝相華文軒丸瓦は完全な形を残すものが少ないが、第2次調査のものは周縁部に珠文を配したもので、多賀城422か425と推定される。第3次調査のものも細片であるが多賀城422か423と考えられる。陰刻花文軒丸瓦は第2次調査A群窯跡からのみ出土しており、6葉（多賀城450）と9葉（多賀城451）が認められる。他の軒瓦に比べて残存率が高い（瓦の分類・型番は『多賀城跡 政庁跡本文編』（多賀城研1982）に依拠した）。

均整唐草文軒平瓦は上下左右の区画線が1本のもので、多賀城721Bと推定される。顎面に波状の文様が施される。721Bは多賀城Ⅲ期の721Aの範を彫り直したもので、貞観地震の復興に際して古い範を再利用したものと考えられている（柳澤2013a）。

丸瓦と平瓦は第2次調査で詳細に分析されている（仙台市1987）。まず、丸瓦は全て有段で、凸面は縄タタキ後にロクロナデが施される。粘土紐積みで凹面には輪積み痕と布目が残る。丸瓦Ⅰ類は胎土が緻密で、凸面が丁寧なナデが施される。凹面の布目は緻密である。丸瓦Ⅱ類は胎土に大きめの砂粒を含み、凸面のロクロナデは粗雑で縄タタキ目を残す。凹面の布目は比較的粗い。Ⅰ類はB・C群窯跡から、Ⅱ類はA群窯跡から出土しており、時期差と考えられる。

平瓦は一枚作りで5類に細分される。このうち、平瓦Ⅲ類以外は凸面に縄タタキ目のつぶれが認められる（Ⅲ類は凸面ヘラケズリ）。また、Ⅰ・Ⅱ類は凹面全面に粗いナデが施されるのに対し、Ⅲ類は全面に丁寧なナデ、Ⅳ・Ⅴ類は部分的なナデと粗い布目が認められる。以上の特徴から、平瓦は全て凹型台を利用して凹面および側面・小口面を調整したものと推定された。

### 4. 出土した須恵器について

第1次調査と第2次調査A群窯跡では須恵器はほとんど出土していないのに対し、第2次調査B・C群窯跡と第3次調査では比較的多くの須恵器が出土した。このうち、第3次調査S02・3から杯約100点のほか、大小の甕（土師器甕と器形が共通するものを含む）・壺が出土した（第5図）。ヘラ切り無調整の杯が多数を占め、その器形は断面が逆台形を呈し底径が口径に対して大きい。これと類似した須恵器杯は、例えば市川橋遺跡SX1351C・D河川（SX1351Cは延暦9年（790）の木簡を伴う）や多賀城跡SE2101B（天長9年（832）の漆紙文書を伴う）などで認められ、9世紀前葉から中葉と考えられる。

次に、第2次調査B群窯跡およびその灰原などからは、須恵器杯・甕が出土した。杯は第3次調査のものよりやや器高が高いものを含むが、断面は基本的に逆台形である。底部は回転糸切りとヘラ切りが混在しており、前者がやや多い。

同C群窯跡およびその灰原などからは、須恵器杯・甕・獣脚が出土した。杯は回転糸切り無調整で器高もB群窯跡よりやや高い。器形は底径が小さく体部が丸みをもって立ち上がる、いわゆる椀形を呈する。この椀形の杯であるが、内面はロクロ目の凹凸がなく滑らかで「コテ状工具」の使用が想定された。B群とC群の杯は器形や「コテ状工具」の導入という点で違いが大きい（仙台市1987、館内2021・2022）。また、B群は軟質で砂粒を多く含むが、C群は十分に還元されて硬質で、胎土も比較的緻密である。B・C群については貞観地震（869年）を上限とし、B群が9世紀中葉、C群が9世紀末葉と想定されている（斎野2012）。

以上の須恵器の特徴から、第3次調査→第2次調査B群→同C群と変遷するのが明らかである。9世紀代を通して五本松窯跡で須恵器が生産されていたことになる。

## 5. 製品の供給先について

五本松窯跡は多賀城IV期の瓦、すなわち貞観地震後の復興瓦を焼成した窯である。陸奥国分寺・多賀城跡・多賀城廃寺跡で第IV期の瓦が出土しており、これらの遺跡に製品が供給されたと考えられる。ただし、第2次調査A群窯跡の陰刻花文軒丸瓦は陸奥国分寺では確認されておらず、多賀城跡・多賀城廃寺跡にのみ供給された。また、貞観地震後、多賀城III期の瓦の再利用で多賀城政庁を優先的に再建し、その後、宝相華文軒丸瓦・連珠文軒平瓦のセットで陸奥国分寺を再建したと考えられている（柳澤2013b）。五本松窯跡は陸奥国分寺再建の段階から多賀城政庁の補修段階（陰刻花文軒丸瓦）に該当するが、堤町窯跡と異なり連珠文軒平瓦は未発見である。また、同時期の安養寺中団窯跡などに比べ軒瓦の出土が少ない。IV期段階の各窯跡での製品の作り分けや、与兵衛沼窯跡で確認されたような他地域の技術者の関与が本遺跡で認められるかなど、検討の余地がある。

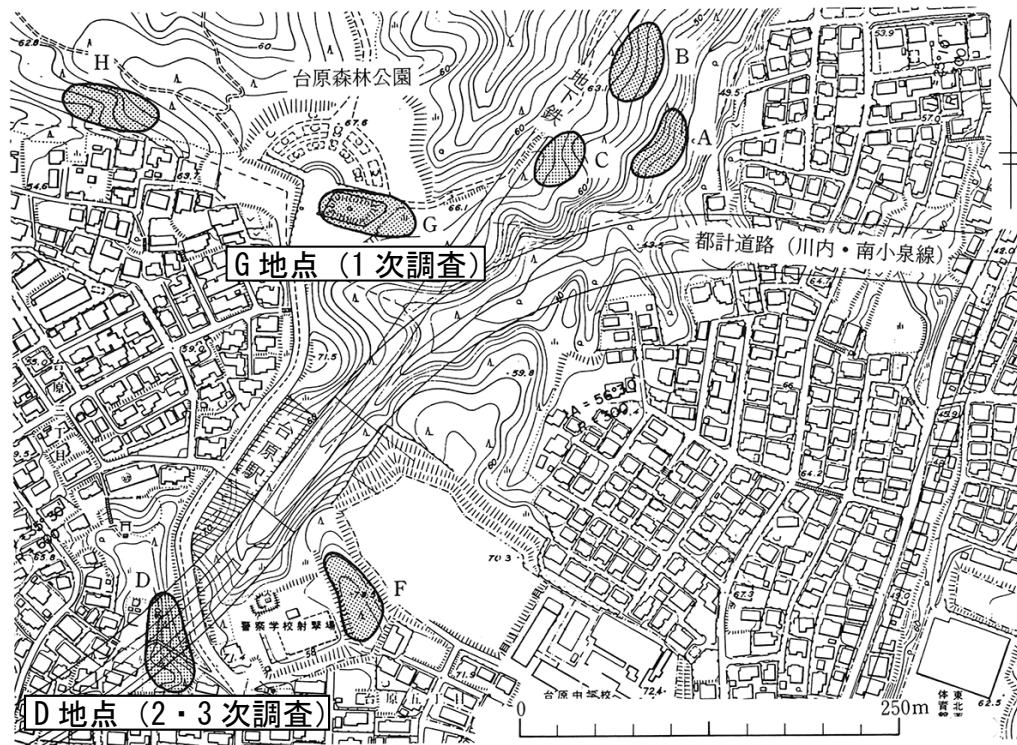
## 関連文献

- 1 古窯跡研究会 1973『陸奥国官窯跡群』
- 2 斎野裕彦 2012「仙台平野中北部における弥生時代・平安時代の津波痕跡と集落動態」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』
- 3 仙台市教育委員会 1982「堤町窯跡B地点」『仙台平野の遺跡群』1（仙台市文化財調査報告書第37集）
- 4 仙台市教育委員会 2021「上杉六丁目遺跡の調査」『仙台平野の遺跡群』31（仙台市文化財調査報告書第491集）
- 5 仙台市教育委員会 2022「穴田東窯跡の調査」『穴田東窯跡ほか』（仙台市文化財調査報告書第498集）
- 6 館内魁生 2021「平安時代陸奥国における陶磁器模倣とその地域性」『考古学研究』68-1
- 7 館内魁生 2022「須恵器杯への新技術の導入とその背景」『考古学研究』69-3
- 8 内藤政恒 1939『宮城県利府村大澤瓦窯址研究調査報告』
- 9 内藤政恒 1963「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦（I）」『歴史考古』9・10
- 10 柳澤和明 2013a「発掘調査からみた貞観11年（869）陸奥国巨大地震の被害と復興」『宮城考古学』15
- 11 柳澤和明 2013b「多賀城・多賀城廃寺・陸奥国分寺」『古代の災害復興と考古学』古代東国の考古学2

## ※報告書

- 12（1次）仙台市教育委員会 1973『五本松窯跡』（仙台市文化財調査報告書第6集）
- 13（2次）仙台市教育委員会 1987『五本松窯跡』（仙台市文化財調査報告書第99集）
- 14（3次）仙台市教育委員会 2000「五本松窯跡（第3次調査）」『五本松窯跡ほか』（仙台市文化財調査報告書第247集）

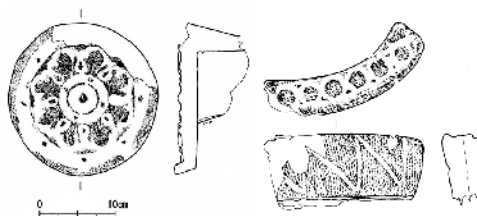
この他、分布調査は仙台市第40集に掲載されている



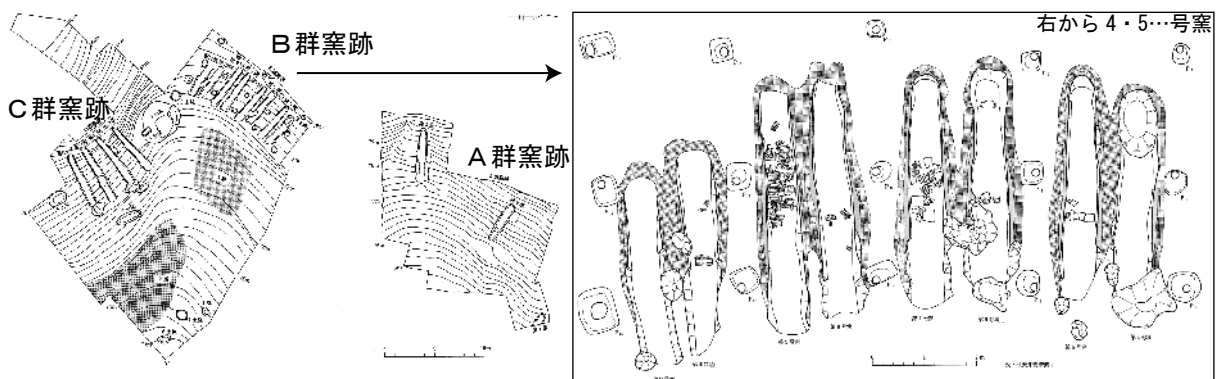
第2図 五本松窯跡の各地点 (文献13に加筆)

表 五本松窯跡 窯の規模と出土遺物

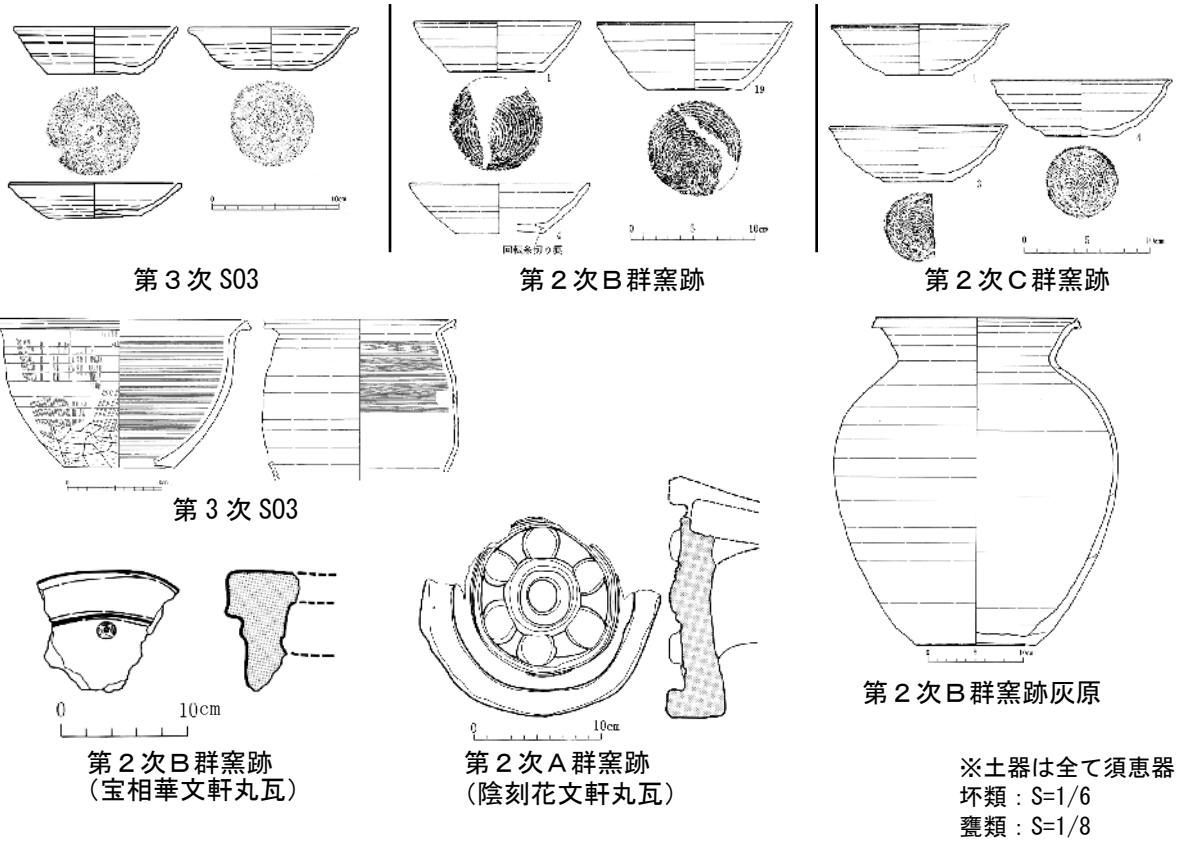
		残存長	最大幅	焼成部 床面傾斜	窯構築材や 焼台の瓦	出土瓦	須恵器の 出土
1次	1号窯	4m	0.75~0.8m	20°	平	丸・平・宝相華?・歯車	なし
	2号窯	大きく削平	0.7m	20°			なし
2次A群	1号窯	大きく削平	0.8m	20°		丸・平	
	2号窯	4.2m	1m	20°		丸・平	
	3号窯	5.4m	1m	25°		丸・平・陰刻花	
2次B群	4号窯	4m	0.75m	10°		丸・平	あり
	5号窯	4.35m	0.65m	10~25°	丸・平	丸・平	あり
	6号窯	4.2m	0.75m	10~25°	丸・平	丸・平	あり
	7号窯	4.5m	0.7m	15~20°	丸・平	丸・平	あり
	8号窯	4.4m	0.75m	10~20°	平	丸・平	あり (多数)
	9号窯	4.7m	0.8m	10~25°	丸・平	丸・平	あり
	10号窯	大きく削平	0.7m	10~25°	平・須恵器	丸・平	あり (多数)
	11号窯	大きく削平	0.65m	10°		丸・平	あり
	12号窯	5.8m	0.9m	20~30°	丸・平	丸・平	あり
	13号窯	5.9m	0.9m	25~40°	平	丸・平	あり
2次C群	14号窯	6.4m	0.8m	20~35°	平	丸・平・宝相華	あり
	15号窯	5.7m	0.9m	20~25°	平	丸・平	あり (多数)
	SO1	大きく削平	0.95m	15~20°			あり
3次	SO2	5m	1m	25~30°		平	あり (多数)
	SO3	3.5m	1m	25~37°			あり (多数)



第3図 参考：穴田東遺跡出土瓦 (文献1)



第4図 左：第2次調査調査区 右：第2次B群窯跡と覆屋 (文献13)



第5図 五本松窯跡出土遺物 (文献12～14から作成)